

保育の実践から見る

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」とのつながり ～あやとり遊びの実践を通して～

白井 智佳子

はじめに

「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」が改訂され、2017年文部科学省・厚生労働省・内閣府告示、2018年4月1日より実施となっている。今、様々な保育・教育現場の関係者は実践と研修を通してそれらへの学びを深めているところであろう。今回の改訂においては、アクティブ・ラーニングの視点から保育所・幼稚園・幼保連携型認定こども園・小学校・中学校・高等学校・大学と教育の確かな質を保証するための三つの柱（知識・技能の基礎、思考力・判断力・表現力等の基礎、学びに向かう力・人間性等）を明確にし、多様な社会情勢の変化に柔軟に対応できる力を身に付けることを目指している。新幼稚園教育要領（以下、「新教育要領」と表記）前文に幼稚園に求められている役割が『一人一人の幼児が、将来、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにするための基礎を培うことが求められる。』と記されている。この生きる力の基礎となる体験や学びをアクティブ・ラーニングとする『主体的な学び・対話的な学び・深い学び』の教育内容を実現することで身に付けられるよう教育現場で実践していかなければならない。

そこで『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』（以下、「10の姿」と表記）として具体的な姿が明記されたことは、保育士・幼稚園教諭・保育教諭にとって、自分の保育を見通すとき、また保育を振り返るとき、目の前の一人一人の子供の姿を理解しようと努めるときの心強い指針となるであろう。

この度の改訂を受けて、筆者が実践してきた「あやとり遊び」（以下、「あやとり」と表記）の取り組みが、この「10の姿」にどのようにつながっていくのかを論ずることとする。

筆者は、新潟市立幼稚園に38年間勤務し、2015年までの9年間を園長とし

て勤めた。筆者は、園長として着任した時から「あやとり」を通して子供たちと関わる機会がないかと考えていた。「あやとり」のような昔からある遊びは、祖母や親から伝承されたり、仲間同士で教え合ったりする遊びである。しかし、現代においては多くの子供の遊びは、そうした伝承遊びより一見楽しいと思える遊びやTV・ゲーム・DVDと遊び形態が変化している。このような変化の中で、消えつつある伝統的な遊びが多くあるように感じる。あやとり・こま回し・けん玉・手毬遊び・わらべ歌遊・お手玉・様々な外遊び等、これらの遊びは保育所や幼稚園・幼保連携型認定こども園で、教育の一つとして意識して子供たちに体験してほしい遊びでもある。筆者にとって「あやとり」への取り組みはその一つの事例として挙げられるものである。

そこで、日常の保育の中で無理なくしかも自然に子供たちと「あやとり」の時間がつくれないかと事前に担任とも相談し、「お楽しみ会食」(年長組3学期の園長との会食会)という時間を活用して取り組むこととした。

9年間の取り組みの中で、当初は、子供たちとの関わりが楽しく、また子供たちの一人一人の反応や取り組み方の違いや個性の違いに面白さを感じながらやっていた。しかし、次第にそこから見える様々な子供たちの姿に、改めて逞しさ・好奇心・忍耐力・人やものに関わる力・挑戦意欲等、挙げればきりが無いほど子供たちの潜在的な可能性の豊かさを感じ、取り組む程に子供たちも筆者も互いに楽しさと充実感を感じるようになってきた。ここでは「あやとり」一つの取り組み例ではあるが、そこにどのような意味があるのかを「10の姿」と重ね合わせながら考えていきたい。

尚、本研究の遂行にあたって、事前に研究園の園長・対象クラス担任・保護者に研究内容・目的を説明し写真掲載・教育課程の引用の同意を得た。

目 次

はじめに

I 年長児の育ちと「あやとり」

II 新潟市立牡丹山幼稚園の教育課程より抜粋
(目指す幼児の育ちの姿とねらい)

III 「あやとり」を実践するための準備・配慮事項

IV 「あやとり」の実践事例と「10の姿」からの考察

- 1 園長との会食の様子と「あやとり」への興味付け
- 2 「あやとり」をやるときの約束
- 3 指の名前について
- 4 初級「パンパンぼうき」の挑戦
- 5 担任との連携
- 6 子供の姿より ー思うように動かない指ー
- 7 子供の姿より ー早く出来る子・ゆっくりな子ー
 - 例 1
 - 例 2
- 8 子供の姿より ー名人になるための課題ー
 - 例 1
 - 例 2
 - 例 3
 - 例 4
- 9 子供の姿より ー保護者との関わりー
- 10 子供の姿より ー時間の感覚ー
 - 例 1
 - 例 2
- 11 「社会生活との関わり」「自然との関わり・生命尊重」
「豊かな感性と表現」の「10の姿」とのつながり

おわりに

引用・参考文献

I 年長児の育ちと「あやとり」

筆者が園長時代に子供も筆者も楽しみにしており、とても思い出に残る取り組みがあった。それは、年長児が幼稚園の教育課程修了を迎える3学期の1月中旬から2月末まで年長児が数名ずつ園長室で一緒に給食を食べる「お楽しみ会食」である。そして、食後の時間を楽しいだけでなく、子供にとって心に残る意味ある経験につなげたいと、担任ともよく相談して「あやとり」を子供たちと取り組むこととした。

この取り組みを行うに当たり、子供の育ちの背景を述べる。園では年長児が2学期12月に生活発表会を経験する。年長児の生活発表会は、4月からクラスの仲間と積み重ねた様々な生活経験、感動体験をもとに、年長児自ら物語を創作し、それを劇や音楽表現にして保護者の前で発表する行事である。子供たちがクラスの皆で「楽しい生活発表会にしていこう」と目的に向かって遊びをつくり上げていくその過程を、教師（ここでは敢えて幼稚園教諭・保育士を分けることなく教師とする）は支え、援助する。その結果、子供たちが目的を達成し、その喜びや満足感を様々な姿で表してくれたときの手応えは、年長児を担当する者の醍醐味でもある。様々な課題に対し一つ一つ子供たちが主体となって解決に向けて試行錯誤し、トラブルを乗り越え一人一人の子供が自分の役割を実感しながらやり切っていく。このような課題に向かって行きつ戻りつしながら一步一步確かな手応えを積み重ねていく体験は、一人一人の子供の心に自己有用感・自己肯定感を定着させ自信を生む大切な過程の一つである。教師は、その子が今育とうとしている芽を捉え理解した上で、適当と思える援助で一人一人の育ちを支えていくのである。このような協同的な遊びは、年長児を豊かに逞しく成長させる体験となるのである。

そのような充実した2学期を経て子供たちは、幼稚園課程の修了と小学校就学に向けての期待へと心が向いていく。幼稚園生活の締めくくりともいえる3学期は、仲間との関わりも充実していくと共に一人一人が様々な場面で自分自身と向き合う時期でもある。生活習慣の自立・仲間とよりよく関わることへの気付き・新しいことへの挑戦意欲の高まり等、子供たち一人一人が自分自身と向き合い、主体的な遊びを通して自分に対する自信と確かな力となる土台を身に付けていく大切な時期なのである。これらの力はこれまでも経験し積み重ねてきているのではあるが、我々教師は、幼稚園課程修了を前に一人一人の育ちを再度見直し、就学に向けてその子の育ちの中でさらに自信を付け、自分の良さを実感できる経験はないかを職員全員で協議検討する。その協議の視点こそ新教育要領で示された「10の姿」がそれであると考えている。

そこで、年長児一人一人の育ちと、園生活や遊びの実態を見ていくと、3学期は仲間の姿を刺激に紐ごま回しに挑戦したり、登り棒・跳び箱・縄跳びに挑戦したり等、これまでも体験はしているのだが、より挑戦意欲をもって「もっとこうなりたい」という思いで様々なことに取り組む姿が見られる。このような仲間との刺激合いの中で挑戦意欲が高まっているという実態と、子供が自ら挑戦したいことは様々であり、その子のやりたいことから取り組めるような環境を整える援助が必要であることを踏まえ、担任と相談し、挑戦することの一つに「あやとり」を筆者は子供たちに提案した。

Ⅱ 新潟市立牡丹山幼稚園の教育課程より抜粋 (目指す幼児の育ちの姿とねらい)

幼稚園は、それぞれの園が幼稚園教育要領に示された内容を満たすよう教育課程を作成している。今後はさらに平成30年度より施行される幼稚園教育要領第1章・第3節教育課程の役割と編成等で示されている項目を視点に再編成していくことが求められており、すでに取り組みも成されていると思われる。

ここでは、筆者が「あやとり」を実践した当時の新潟市立牡丹山幼稚園教育課程の一部を下記に掲載する。

新潟市立牡丹山幼稚園教育課程 5歳児					
期間	育ってほしい姿	ねらい	小学校につながる経験		
1 期	4 月 上 旬 ～ 5 月 下 旬	◎年長になった喜びや自覚をもちながら、園生活を楽しくんでいく。	<ul style="list-style-type: none"> ○年長組に進級した喜びを十分に味わい新しい生活に期待をもつ。 ○気の合う友達に自分の思ったことを伝えたり、友達の話に関心をもって聞いたりしながら一緒に遊ぶ。 ○年少児の世話(身支度・給食)をしながら、年長組としての自覚を高める。 ○安全に関わる約束など、園生活でのきまりを確認し合い、年少、年中組の手本になる。 ○春の自然や、身近な動植物に触れながら興味や関心を深める。 	<p>小学校につながる経験</p> <ul style="list-style-type: none"> ・つくし、よもぎ等、自然の恵みから料理体験 ・種や野菜の苗を植え、自分たちで畑の世話 ・竹の子掘り 竹の子料理 	<ul style="list-style-type: none"> ・通年、近隣の公園へ散歩 ・ごみ拾い ・近隣の中学校へ花見 ・電車に乗って、弥彦公園遠足

保育の実践から見る「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」とのつながり

期間	育ってほしい姿	ね ら い	小学校につながる経験
2 期 6 月 上 旬 ～ 7 月 下 旬	◎友達と意見を出し合いながら、同じような思いや目的をもって遊ぶ。	<p>○少し難しいことや、なぜだろうと不思議に思うことに向かって試したり、繰り返し挑戦したりする。</p> <p>○友達に自分の考えを伝えたり、相手の考えを受け入れたりしながら心を通わせて遊ぶ。</p> <p>○生活習慣を自分から進んで身に付け、自分でやることに自信をもつ。</p> <p>○野菜や植物などを育てながら収穫の喜びを味わう。</p>	<p>・様々なごっこ遊びやルールのある遊びを仲間とつくり出し楽しむ</p> <p>・近隣のいちごハウスでいちご摘み</p> <p>・いちごジャムパーティーで、園児・保護者・小学校と交流</p> <p>・収穫と料理を楽しむ、味わう（カレー・夏野菜料理等）</p> <p>・徒歩で近隣の介護施設訪問</p> <p>・上堰潟公園散策遠足</p> <p>・徒歩で近隣の絵本館訪問</p> <p>↓</p> <p>↓</p>
3 期 9 月 上 旬 ～	◎気の合う友達とやりたい遊びを見付け、関わりをもちながら夢中になって遊ぶ。	<p>○気の合う友達との関わりの中で、安心して自分のやりたいことに取り組む楽しさを感じる。</p> <p>○教師や友達に、自分の思い付いたことや感じたことを、自分なりの言葉や行動で表しながら遊ぶ。</p> <p>○クラスの友達の姿に関心をもって関わり、目的に向かって遊ぶ楽しさを味わう。</p>	<p>・運動会に向かって皆で考えた遊びや競技に取り組む</p> <p>・大根を育てる</p> <p>・秋の実りと収穫を楽しむ、味わう（芋パーティー・焼き芋大会・姫りんごジャム・あけび・かき等）</p> <p>・登山遠足</p> <p>・路線バスで図書館訪問</p> <p>・小学校の児童会祭りへ参加</p> <p>↓</p>

期間	育ってほしい姿	ねらい	小学校につながる経験
<p>く 12 月 下 旬</p>		<p>○遊びや生活に必要な約束が分かり、気持ちよく生活をする。</p>	<p>↓</p> <p>・大根の収穫と料理</p> <p>↓</p> <p>・徒歩で子ども創造館訪問</p>
<p>4 期</p> <p>く 1 月 上 旬 く 3 月 下 旬</p>	<p>◎クラスの友達と互いに思いを交わし合いながら見通しをもって共通の目的に向かい、遊びをやり遂げていく。</p>	<p>○一人一人が自分のもっている力を発揮し、互いの良さを受け止めながら遊びに取り組む。</p> <p>○友達と問題の解決策を考え合い、折り合いをつけながら遊びを進めることができる。</p> <p>○クラスの皆や友達と、共通の目的を達成する充実感を味わう。</p> <p>○生活に見通しをもち、次を考えて行動することができる。</p> <p>○冬の自然や自然現象の不思議さに関心を向け、冬ならではの季節感を楽しむ。</p>	<p>①</p> <p>・お正月遊びや日本ならではの遊びに取り組む(かるた・百人一首・双六・トランプ・紐ごま回し・あやとり・羽根つき等)</p> <p>↓</p> <p>・小学校で出前授業を受ける</p> <p>↓</p> <p>・小学校見学</p> <p>↓</p> <p>②</p> <p>・自分から様々なことに挑戦する。(跳び箱・長縄跳び・短縄跳び・登り棒等)</p> <p>↓</p>

上記の教育課程の年長児4期「育ってほしい姿」「ねらい」「小学校につながる経験①②」を踏まえて「あやとり」に取り組む。

Ⅲ 「あやとり」を実践するための準備・配慮事項

1 準備

(1) かぎ針・毛糸

毛糸の色や柄は、数種類用意する。

(2) 「あやとり証明書」の作成

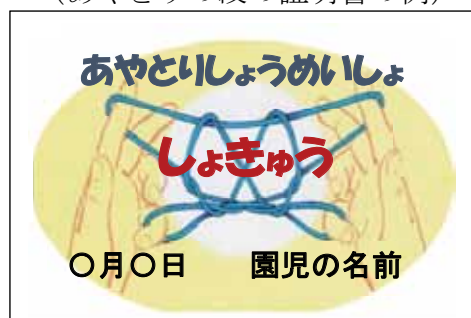
〈あやとりの段と証明書〉

- ① 初級・・・パンパンぼうき
- ② 1段・・・1段ばしご
- ③ 2段・・・2段ばしご
- ④ 3段・・・3段ばしご
- ⑤ 4段・・・4段ばしご
- ⑥ 5段・・・5段ばしご
- ⑦ 6段・・・6段ばしご
- ⑧ 名人・・・紙芝居
- ⑨ チョウ名人・・・ちょうちょう
- ⑩ ウルトラ名人・・・山のお月様
- ⑪ スーパー名人・・・あげは蝶
- ⑫ チョウウルトラ名人・・・ようよう
- ⑬ チョウウルトラスーパー名人・・・とんねる
- ⑭ お師匠様・・・一人あやとり

(あやとりを編む毛糸)



(あやとりの段の証明書の例)



※引用：「あやとり いととり」・福音館書店出版
さいとうたま(採取・文)・つじむらまろう(絵)

2 配慮事項

(1) 「あやとり」の色や柄は、子供自身が決める。

- ・これは、「自分のあやとり」という意識を高め、大切にしている気持ちにつながるようにする。

(2) 「あやとり」に使用する糸は、子供たちの目の前で編む。

- ・毛糸から「あやとり」の糸に変化する様子を見て期待感や「あやとり」への興味関心が高まるようにする。

(3) 最初の技は、「パンパンぼうき」にする。

- ・どの子も必ず完成できる技から始めることで達成感が味わえ、次への挑戦



(完成したあやとりの糸)

意欲につながるようにする。

- (4) 「あやとり証明書」を子供に渡すことで、一人一人の子供が目標をもちやすいようにする。
- ・但し、どこまで挑戦するかは一人一人の意思に添いながら段をとることだけにこだわることなく、その子なりの楽しさの中で挑戦していけるようにする。
 - ・証明書を渡すことについて担任ともよく話し合い、安易に「出来たらもらえる」ということを褒めるのではなく、その子が自分の挑戦したい目当てを持ち、自分なりに達成しようとするその姿勢を認め、支えていくことを共通理解する。
- (5) もうすぐ小学校入学ということを踏まえ、一人一人の進み方や気持ちの動きに合わせてゆったりした時間を保証し、その子が「達成できた！」という実感が味わえ、その子の自信につながるようにする。

IV 「あやとり」の実践事例と「10の姿」からの考察

子供たちが園長室での「お楽しみ会食」で、どのように「あやとり」と出会うのかを具体的に順を追って記述する。また、子供たちとの「あやとり」への取り組みの様子を事例として示し、「10の姿」とどのようにつながるのかを考察する。

1 園長との会食の様子と「あやとり」への興味付け

11時45分頃、4人の年長児が給食を持って園長室にやってくる。園長との会食が始まると、幼稚園に入園した時泣いたことを覚えている話や幼稚園生活で楽しかったことや困ったことなど話が盛り上がる。また、小学校について知っていることや入学準備で購入するランドセルなどの話、勉強を楽しみにしている話に花が咲く。



(お楽しみ会食の様子)

テーブルの上に幾つかの毛糸を並べてあることに気が付き、「園長先生、この毛糸、どう

したの？」と子供たちは尋ねてくる。「これはね。ただの毛糸だけれど、この毛糸から面白いおもちゃができるんだよ」と伝えると、「なに、なに！」と一気に子供たちの目が輝く。園長は、「見ていてね」とかぎ針で編み始め、「あやとり」の糸が完成する。完成した糸で「パンパンぼうき」をやって見せる。子供は素直に「わー、すごい！」と驚き興味津々の表情になる。中にはごくわずかではあるが「あやとり、したことがある」という子もいるが、ほとんどの子が初めてである。「みんなもやってみる？」の園長の問いに、どの子も「やりたい！」と意気込みが伝わってくる。そこで、子供たちは好きな色の毛糸をそれぞれ選ぶ。園長は、子供たちが給食を食べ終わるまでに目の前で一人一人のお気に入りの色の「あやとり」の糸を編む。給食を食べ終わり片付けが終わると、子供たちは自分の「あやとり」の糸を手に取り「早くやろうよ！」と、自分から新しいことに挑戦しようと目を輝かせて「あやとり」に取り組む。

このように、年長児全員（約30名）と「あやとり」を実施する。

2 「あやとり」をやるときの約束

物事に取り組むときは約束事があることが多い。皆が楽しく遊び、気持ちよく取り組むためにはルールや約束事が必要であることを年長児は遊びを通じて

よく知っている。そのような生活や遊びに必要な規範意識は年長児になるとかなり身に付いてきている。滑り台をするときには順番に並んだほうが気持ちよく遊べること。ハサミを持つときは刃先のほうを握って持つと安全であること。ゲームにはやり方や約束があり守ることで遊びが盛り上がっていくこと等。幼稚園に入園した3歳児のときからの様々な生活・遊び体験を通して、やってよいこと悪いことを判断し行動できるようになる。そこで、筆者は、「あやとり」をするときの約束を2つ提案する。

＜「あやとり」をやるときの約束＞

- ① 「あやとり」の糸をなくさないよう、いつも決めた場所（自分の道具箱）にしまうこと。
- ② 「あやとり」の糸を首に掛けて遊ばないこと。

㊦ この2つの約束が何故必要なのかを子供たちと対話しながら、子供自身が考え気付けるように伝える。子供たちは、「ちゃんと片付けないと、なくすから」・「首に掛けていると、何かに引っかかって危ないから」など、話し合うことで約束事への意識が高まる。

考察（下線部の「10の姿」とのつながり）

㊦「健康な心と体」「道徳性・規範意識の芽生え」

- ・ 「あやとりの糸の片付け」に関しては、自分の持ち物をどのように扱えばよいかを意識するようになることを期待しての約束である。これは基本的な生活習慣として気持ちよく生活するにはどうしたらよいか気付き、整理整頓することが生活しやすさにつながるという基本である。子供の中にその必要感があることが重要であり、その子にとって大切なものであればあるほどその意識は確かなものになると考える。そして、自分にとって大切な物という意識をもてる子は、人にとって大切な物にも思いを馳せることができるようになっていくのである。
- ・ 「あやとりの糸を首に掛けて遊ばない」という約束は、もし首に糸を掛けるとどのような事が起こるか想像し、安全に遊ぶことへの意識付けとなる。教師は、子供たちに危険性を感じ取る力があることを信じて日々の生活や遊びの中で具体的に状況が見えるように言葉がけることが大切である。年中・年長児くらいになると子供はこの約束を言葉で聞くだけでも想像することができ、やってよいことと悪いことの意味を感じ取ることができるようになる。

3 指の名前について

「あやとり」の技を伝えるとき、指の名称を繰り返し伝える場面が多くあることから、① 子供たちに「指の名称」を尋ねる。すると多くの子が「お父さん指」「お母さん指」と答える。園長は「お父さん指・お母さん指という呼び方もあるね。皆はあと少しで小学生になるから、今日は特別に大人の呼び方を覚えてみましょう。」と話すと、子供たちは背をピンと伸ばしてとても真剣にその呼び方を覚えようと耳を傾ける。ここで① 「親指」「人差し指」「中指」「薬指」「小指」の名称を指の意味を楽しく話しながら伝えてから初級の「あやとり」の最初の技「パンパンぼうき」を始める。

考察（下線部の「10の姿」とのつながり）

①「言葉による伝え合い」

- ・ 言葉の獲得は、生活や遊びを通して身近な人と関わって遊ぶ中で、また、やりたい遊びを実現していくために必要があって、次第に獲得されるものである。ここで教師は、「あやとりをしたいという」子供たちの思いを捉え、それに必要な指の名称を伝えることで子供たちは自分たちがこれまで使っていた名称以外にも指の名称があることを知るのである。そして、この指の名称を遊びの中で繰り返し使うことで子供は日常生活に必要な言葉を身に付け、使いこなしていくことができるようになると期待される。

4 初級「パンパンぼうき」の挑戦

最初に挑戦するのは「パンパンぼうき」の技である。これはどの子もこの一回目の時間で必ず完成できる技であろうと予想したからである。

筆者は、子供たちと対峙しながら指の動きが見えるようにして、下記の通りに伝える。

- ① 「糸の中に両親指を入れて糸を引き合いまっすぐにする」
- ② 「両方の小指を小指に近いほうの糸の下から入れてすくい上げる」
- ③ 「右手の中指で左手の糸を下からすくい上げ、そこでクルンクルンと2回中指を回して糸を引く」



「パンパンぼうき」の完成

- ④ 「左手の中指で、右手中指の下の糸をすくい上げて引く」
- ⑤ 「両手を2回パンパンと叩く間に、右手の親指と小指の糸を指から外しながら糸を引くと出来上がり」

当然だが①～⑤の表現は、最低限必要な伝え方である。実際には、一人一人の子供たちの表情・指の動きを見ながら、状況に合わせた言葉がけを行う。

⑦ 言葉と指の動きをゆっくり繰り返し、一人一人の迷っているポイントではゆったりと待ち、その子の気付きを支えながら2・3回繰り返すと全員が完成できるようになる。 ⑧ 子供たちは「パンパンぼうき」が完成できたことに満足感をもち「もう一回やってみる」「先生、今度見ているだけにして。自分たちで出来るかどうかやってみる」。ここで、園長はこんな短い時間で完成できるようになったことの素晴らしさを手放して褒め、「あやとり初級」の証明書を一人一人に手渡す。まだまだいろいろな技があり、「1段・2段・3段・・・」と段が上がっていくことを伝え、次の意欲へとつなげる。

考察（下線部の「10の姿」とのつながり）

㊦ 「思考力の芽生え」「言葉による伝え合い」

「数量・図形・文字等への関心感覚」「健康な心と体」

- ・ 「あやとり」との出合いは、初めての子がほとんどであり新鮮さがある。「やってみたい」という期待が膨らむ遊びを通してそのものの特性に気付き、楽しさや満足感を得ながら仕組への気付きが深まっていく。繰り返し挑戦することでより「あやとり」の糸を使いこなすことが期待される。
- ・ 子供は教師の言葉に耳を傾け、指の動きを集中して見ながらやり方を理解し判断して指を動かす。そして記憶しようとする。子供は、このように複雑な体験を「やれるようになりたい」という一心で、自発的な遊びを通して獲得していくのである。その気持ちを支えるのは、子供たちの新しいことに挑戦する期待感・好奇心があつてこそのことである。教師は子供一人一人に添った肯定的かつ励ましの言葉がけを考慮しながら、どの子もやり遂げた実感が味わえるようにすることが大切である。
- ・ 「あやとり」の糸をとるごとに糸全体の形が変わり、次はどんな形になるのか予想し、次々と形が変化していきながら「パンパンぼうき」が完成する。この過程で子供は形の変化の面白さや糸を取りながら糸が長くなった

り短くなったりする感覚も体感している。つまり、空間認知として物を「位置」「向き」「動き」と三次元的に見ていく力の芽が育まれていくのである。

- ・ 子供にとって指一本一本を独立させて動かすこと。右手と左手を違う動きにすること。5本の指の中で一本だけを独立させて動かすこと。糸を取るために糸全体を緩めないで指だけを動かすこと。ある部分の糸は緩め、ある部分の糸は張り指をコントロールしながら糸を取ること等、手と指をそれぞれコントロールしながら動かすことは、子供の体を器用に操る能力を刺激し、脳の活性化にもつながる。

㊦「自立心」

- ・ 初めてのことに挑戦することは、期待感があると同時に不安感もある。そんな子供の心の揺れも教師は感じ取りながら、やり遂げようとする気持ちを支えることが大切である。そのためにはどの子も一歩頑張れば実現できる取り組みであることが重要である。さらに、皆で「パンパンぼうき」が完成できたことは、満足感や達成感となり次への意欲にもなっている。

5 担任との連携

「お楽しみ会食」が終わりの時間になり保育室に戻る子供たちは、大喜びで担任に報告する。それを受け止める担任は、今初めて知ったかのように子供たちの話に耳を傾ける。担任は「それなら、他の友達にそのパンパンぼうきを見せてくれる？」と声を掛けると、㊦ 得意になって「あやとり」の糸を取り出し、クラスの皆の前で技を披露する。4人揃って「・・・はい、パンパンぼうきの出来上がり！」と見せる。すると「すごーい！」と拍手喝采を受ける。それは4人にとって自己肯定感にもつながり、他の子供たちは、「お楽しみ給食に行く楽しいことが出来る」との気持ちがより高まり、期待して待つようになる。

考察（下線部の「10の姿」とのつながり）

㊧「自立心」「協同性」

- ・ クラスの仲間に覚えただけの「あやとり」の技をやって見せる機会を通して、この4人にとって自分の存在感を感じられる場であり、皆に認められることで自己肯定感にもつながるのである。他の友達も4人の「あやとり」を見ることで刺激を受け、自分自身の中にも目的意識が芽生え、取り組みへの意欲へとつながる。これは、集団生活の中だからこそ、この教師の援助が効果的となる場面である。

6 子供の姿より ー思うように動かない指ー

最初に「あやとり」をやり始めて子供の指の動きに注目すると、㊦ 年長児といえども指の一本一本を他の指に掛かっている糸が外れないようにコントロールして動かすということはなかなか難しいのである。そして、最初は指を動かそうとすると無意識のうちに口や首にも力が入り一緒に動いてしまう子もいる。一本を動かすと他の指から糸が外れたり、糸を操作するには糸全体を緩めたり、時には



(一人一人の子供に添った対応)

しっかり張ったり、一部を緩め、その他の糸は張っておくといった操作をしなければならぬ。指一本一本の操作と、糸全体の操作を同時進行で行わなければならない。これらの複雑な動きを「あやとり」の楽しさとやる気から子供は自然に身に付けていくのである。子供の指先は、個人差はあるものの年長児であってもまだ未分化なため、真剣に指先に注意を集中させると同時に口元や首・肩なども動いてしまうのである。しかし、「あやとり」に取り組む時間を重ねると次第に指先の動きが滑らかになり、その姿は目を見張るものがあった。子供の身体機能発達の特徴の一つに、体幹から末端へという法則があるが、「あやとり」はその末端（指先）の発達を促す遊びであることが分かる。年長組の子供たちは、3月の近くになると見違えるように自然な指の動きでいくつもの技を見せてくれるようになる。子供たちは、衣服の着脱・箸やハサミ、鉛筆を使う・紐結び・手遊びや・指遊び等、様々な生活や遊びを通して指の感覚やコントロール力は身に付いていくことであろう。そう考えると「あやとり」は、一本一本の指の先まで微妙なコントロールをしながら遊ぶことができる楽しい遊びなのである。昔からの遊びとは、子供の育ちの道筋に叶った遊びであることが分かる。

考察（下線部の「10の姿」とのつながり）

㊦「健康な心と体」

- ・ 様々な遊びを通して多様な動きに親しむことは、子供にとって重要な体験である。近年、正しい箸や鉛筆の持ち方が身に付いていない姿を多く目にする事や、蝶結びができないといった、身近な生活技術が軽視されている状況が垣間見られる。子供が「あやとり」に親しむことで器用に自分の指を操られるようになることは、やがて自分の体そのものへの調整力を身に付けていく芽となると考える。

7 子供の姿より ー早く出来る子・ゆっくりな子ー

例 1

子供たちの「あやとり」を見ていると、理解が早く習得が早い子・自分のペースでゆっくり習得していく子と、一人一人習得の仕方が違うという実態は当たり前前の姿である。そして、決まって子供たちは一つ技ができると、その技を担当や他の職員に、友達に、親・兄弟に、「ねえ、ねえ、見ていて。6段ばしご出来るようになったんだよ」と、得意げに指を一本一本丁寧に動かしながら技を見せる。相手は「わー、すごい！」と褒めてくれる。㊦ このやりとりがその子の喜びや満足感となり、次への意欲につながるのである。この喜びや満足感の獲得は、理解の早い子もゆっくりな子も同じなのである。もしかすると、時間をかけて習得できた子の方がその満足感は深いのではと感ぜられる場面も多く目にすることが出来る。

年長児くらいになると「早くできるか、出来ないか」をどのように感じているかは様々であろう。

- ・友達の誰よりも早く出来るようになりたいと思って取り組む子。
- ・友達との競争ではなく、自分自身が目標を持って早く出来るようになりたいと思って取り組む子。
- ・友達の姿は見えてはいるが、特に気にしないでマイペースで取り組む子。
- ・周りの仲間がどんどん出来ていく姿に気おくれしてしまう子。
- ・やってみたい、出来るようになりたいと思って取り組むが思うように進まない子。等

㊦ 子供たちの心の中には様々な感情が巡っていることであろう。こうした感情体験を良い悪いで捉えるものではなく、この自分の心の中の感情の動きをしっかり感じながらも、その子なりに堪えたり、悩んだり、自分を奮い立たせたり、穏やかに認めたりと心の葛藤を体験していることこそ大切なのである。この体験が子供にとって感情コントロール力・折り合いを付ける力・思いやりの心につながると考える。

このような経験につながることを意識して教師は、下記のように支え援助することが大切である。

- ・「早く出来るようになりたい」「一番になりたい」と取り組む子には、その意欲を受け止めた上で、一人一人の課題がどこで現れてくるかを見極める。一人一人の課題に対して、その子が自分の力で向き合い解決していけるようにする。
- ・その子のペースを焦らずに待ち、今その子がやろうとしている姿そのものを認め見守り、支え、励ます。

- ・失敗した残念さを子供と共有し、また、どの段階で取り違えたのかを試行錯誤する時間を保障する。
- ・「どこを取り間違えているのか」と子供自身が考え、気付いて、最後までやり遂げようとする気持ちを前向きに支える。等

教師は、その子の取り組みの姿をまるごと受け止め、子供自身が自分らしさを良さとして感じ取れるような言葉がけや見守りの援助を心掛ける。例えば、「5回目の挑戦だね。私だったら諦めてしまいそうよ。なのに〇〇さんは、諦めずにまた挑戦するなんてすばらしいね」等、具体的にその子の良さを前向きな言葉で心から伝えることが重要である。

つまり、「あやとり」は様々な技ができていくことはもちろん楽しさの一つであるが、技ができるまでの過程にこそ大きな意味がある。その子にとって困難を乗り越えたという実感があるほど完成した時の喜びが大きいのである。

例 2

繰り返し「あやとり」の技を進めていくと、子供の記憶についてある特性に気付く。それは、前に覚えた技を忘れやすいということである。ところが、次のような姿もある。㊦ なかなか一つの技ができなくて何度も何度も失敗し、繰り返し挑戦してようやくできた子の多くが、次の段階に進んでも苦労して覚えた技を忘れずにいるのである。子供の発達はその子なりであり、楽しい繰り返しの中で子供なりの困難さがあるからこそ、その力は確かなものになるのである。周りの人との関わり如何によって、その困難はいつか喜びとなり、物事に取り組むときの逞しさや、忍耐強さにもなりうるのである。だからこそ筆者は、その子の困難にぶつかる姿を「自分の心に打ち勝つ大切な過程」「習得するための意味ある試練」と捉え、「失敗は成功の基だよ。いっぱい失敗すればするほどその技が上手になるからね」「あー、惜しい！もう少しだったね」「私もその部分がとても難しかったのよ」等、その子の思いに合った励ましの言葉を考えて支えるのである。

考察（下線部の「10の姿」とのつながり）

㊦「自立心」

- ・子供にとって「あやとり」は自分自身との向き合いの場にもなると考える。自分が何をするのか、したいのかを考え取り組む。このとき周りの大人や仲間と一緒に喜び、励ましてくれることにより、最後までやり遂げようと努力し、その結果認められることで満足感や自分への自信につながると考える。こうした自己肯定感が自立心へとつながり、さらに仲間の関わるときに必要な感情コントロール力・折り合いを付ける力・人に対す思いやりなど「10の姿」である協同性・道徳性・規範意識にもつながっていくと期待できるのである。

8 子供の姿より 一人になるための課題一

例 1

「お楽しみ会食」の回数を重ねることで、「あやとり」をやりたい子が増えてしまい、そこで課題が発生する。それは、園長室に「あやとり」を教えてもらおうと多くの子が集まり園長一人では対応しきれなくなること。一人一人挑戦する技が違うため、じっくりその子のペースに合わせて時間を掛けてやることが難しくなることの2点である。同時に、園長が忙しく教えている姿を見て、⑦ 次第



(園長室に集まる子供たち)

に近くの子供たち同士で教え合う姿が見られるようになったことは、嬉しい姿である。子供たちなりに状況を察して子供たち自身が解決策を見出しているのである。これらの実態と、さらに、「6 子供の姿より」で述べた「一早く出来る子・ゆっくりな子」の実態を受けて、子供たちの習得した技が確かなものになるためにどのような援助が必要か。もう一点として、「あやとり」は、どちらかという一人で行う姿が多くなるが、「あやとり」を通して友達同士がより深い関わり合いを体験できるためにどのような援助が必要かを考えた。そこで子供たちの目的意識が明確になることで自分への挑戦意識が高まり、友達との関わりも深まるような課題を提案することにした。子供たちは、初級～6段を一区切りとし、次は名人技に進むのであるが、このとき名人技に挑戦する前に「名人になるための課題」(子供たちには、イメージしやすいように「名人になるための修行」と名付けて伝える)が必要であることを下記の通り伝える。

<名人になるための修行>

- ① 「1段ばしご～6段ばしご」のすべての技を復習して園長に見せること。
- ② 友達に「あやとり」の技を一つ教えること。このとき、その子が「あやとり」を嫌いにならないように教えること。

この「①②」の段階を経ることを名人になる条件にした。子供たちに、「名人とは、自分のことだけではなく自分が覚えたことを人に気持ち良く伝えられる人でなければならない」ということを伝えると、⑦ 課題を与えられた子供たちは、「わかった!」と、「名人」の意味をきちんと理解したかのような表情で頷く姿がとても印象的である。これは、自分の課題が明確になったことと、これからの自分の行動や役割に対し見通しがもてたことへの姿と考える。

例 2

「6段ばしご」の技まで出来るようになった子供たちは、「1段ばしご」から

「6段ばしご」まで続けてできるかどうか取り組み始める。⑦ 途中で分からなくなると、「ねえ、2段ばしごのここのととり方教えて」と仲間同士教え合う姿が自然に出てくる。また、復習を繰り返している中で子供たちは、「1段ばしごと2段ばしご、ちょっと違うだけだから、どっちか分からなくなるね」「4段ばしごと5段ばしご・6段ばしごのやり方、似ているよね」「3段ばしごのやり方、最初だけ全然違うね」等、糸のととり方の特徴を捉え類型づけられるようになる。



(友達同士教え合う姿)

例 3

子どもの教え方を見ていると、最初は相手の糸を見ながら「親指でこの糸をとって。」「そう、次ね」と、教える子が相手の糸に手を添えて教える姿が多い。それは、⑧ 相手によって今はどのように伝えたら相手が分かりやすいのかということと、また、自分自身も言葉で表現しきれない部分を動作で補っているのではないかと捉えられる。しかし、進むにつれて自分も一緒に同じ技を行い、自分の糸のととり方を見せながら教える姿が多くなる。これは、⑨ 相手がある程度やり方が分かるようになって、自分のととり方を見せながら相手が確認しやすいようにしているのである。さらに見ていくと、向き合って見せている子、また、隣に並んで見せている子等、子供なりに手立てを考えて伝えていることが分かる。「小指の糸を外すよ」「この、三角の形のところに人差し指を入れて」等の言葉も添えながらの伝え方も身に付けていく。相手が途中で失敗すると互いに少し残念な表情をしながらも、「もう一回やる?」「うん、やる」と挑戦意欲を見せる。もう少しで完成



(手を添えて友達に教える姿)



(友達と向かい合って教える姿)



(友達と並んで教える姿)

するというときに失敗すると本人も残念な表情をするが、教えている子の方も自分のことのように残念がり、また相手を励ますのである。技が出来るようになると二人して大喜びする姿を目にする。これは、相手の残念な気持ちに共感し一緒に成功感を味わいたいという同調性が芽生え始めていると感じる。このような過程で教える側の子は、やって見せながら相手の反応を感じ取り、自分なりに試行錯誤して伝えているのである。そして、互いにやり遂げられたことの満足感を共有できる体験は、教える子にとっても、教えられる子にとっても自信につながっていくのだと考える。

例 4

ある日、A子がB男と一緒に「園長先生、見て！ B男さんが、3段ばしごできるようになったよ」と意気込んで園長室に入ってきた。「そう、それはすごいね。B男さん、私にも見せて」と伝えると、② B男は「3段ばしご」をやり始める。その様子をA子が真剣な表情で見守っている。A子は、「そうそう」とB男の糸のとり方に一つ一つ頷き、動きを確認しながら肯定的にB男を見守っているの



(3段ばしごの完成)

である。声には出していないがB男はA子の頷く気配を感じて、安心してとり進めているようであった。B男が「3段ばしご」を完成させると「やったー！」と、A子は我が事のように喜び、B男も満足そうに完成した「3段ばしご」を見せながら「3段ばしごの次は、4段ばしごだね。A子さん、4段も教えて」と、意欲を見せる。

考察（下線部の「10の姿」とのつながり）

②「自立心」「言葉による伝え合い」「思考力の芽生え」「数量や図形、標識や文字への関心・感覚」「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」

- ・ 「あやとり」が楽しくなってくると、「もっと技を身に付けたい」という意欲が高まる。仲間と共に取り組むことで互いの姿がよい刺激になっている。「あやとり」がただ単に技を身に付けるという体験ではなく「名人になるための修行①②」を提案することで子供たちはここでいったん立ち止まり、それぞれが自分と向き合える良い機会になるのではと考えたからである。

修行①の条件は、子供たちの姿から「6段ばしご」まで出来るようになると「1段ばしご」「2段ばしご」と前の技を忘れやすいという実態が出てく

る。そこで、子供たち自身が自分の忘れやすい技は何かを知り、再度確認することで復習の大切さを実感していく。また、「1 段ばしご」から「6 段ばしご」と続けてやってみることで、その糸のとり方と形（図形）の変化を感覚的に理解し始めるのである。こうした取り組みの繰り返しが確かな力になっていくと考える。また、子供自身は自覚してはいないが、この復習をすることで人に教える時のポイントも確認できるのである。

修行②の条件は、ここが教える子、教えられる子にとって、とても大切な経験となる。特に教える側の子には「相手があやとりを嫌いにならないように」という条件が付いている。「相手に分かるように話してやること」「相手の気持ちを感じながら伝えること」「相手のテンポに合わせて進めていくこと」「最後までしっかり見てやらないと、その子がどこで間違えるのか気が付いてあげられないこと」「何度失敗しても、根気強く繰り返し教えてあげること」「どのように技の手順を伝えたら相手が分かってくれるか考えること」「失敗しても、相手がやる気になるように励ますこと」等、ここで様々な人間関係が体験できる。これは、状況を読み取り、相手の気持ちや態度に合わせて思考・判断・行動・表現する経験を大人が言って聞かせても言葉で伝えることはなかなか難しいことである。子供たちは、目的をもって「あやとり」という遊びを通して様々な人との関わり方を学び、人と関わる時のつき合い方や、思いやる心、コミュニケーション力を獲得していくのである。子供たちは教える・教えられる立場を両方体験することで友達との関わりから生じる様々な心の動きを感じ、遊びを通して例 2・3・4 のような学びの姿が総合的に絡み合い、子供たちは生き生きと取り組んでいくのである。

9 子供の姿より —保護者との関わり—

ある朝、C 子の母親が園長室に訪れた。母親の話に耳を傾けると、⑦「C 子が、D 子ちゃんにあやとりを教えても聞いてくれないから教えたくないと言っている」との話を聞かせてくれた。C 子はどちらかという自分のペースで物事を進めたり、取り組んだりすることが得意である。母親は、「あやとり」の段の進み方が我が子のペースで進んでいかず、教える相手のせいで思うように進めないことを危惧しているのだ。

筆者は、母親に C 子が自分の困っていることを自分の言葉で母親に伝えられたことの成長や、それだけ今 C 子が「あやとり」に意欲を示していることのすばらしさをまず伝える。その上で、C 子にとって自分の思い通りに進まない状況の中で相手の気持ちに気付き、相手に合わせてやる気をどのようにもたせたらいいのかということに思いを馳せる経験は、とても重要であること。この経

験は言葉で伝えられることではなく、自分の本当にやりたい遊びだからこそ本人が心で感じながら体験できるよい機会であることを伝える。また、先に進むことより立ち往生する、つまり親にとっては無駄と思えるような姿の中にこそ重要な体験、言葉では伝えきれない体験、実感を伴う体験があり、今まさにしている体験こそ何よりの学びになることを伝える。ここで母親へは、よく C 子の心の動きに気付き、耳を傾け受け止めてくれたこと。このように筆者に伝えてくれたことに感謝し、筆者も親も C 子のこの姿を温かい目で見守り、C 子が必ず乗り越えられると信じて待つことを共通理解する。

子供が頑張っている姿に関心をもって喜んだり励ましたりしてくれる保護者の姿は、園としてもうれしいものである。しかし、時には困難の壁を取り除こうと先走ったり、簡単に乗り越える方法を教えたりするのも保護者である。そんな保護者の気持ちも受け止めつつ、子供を信じ、安心して見守ることが出来るよう助言することも教師の大切な役割である。

その出来事の三日後に、㊦ C 子は、D 子の手を引いて意気込んで園長室にやって来た。「園長先生見て！ D 子ちゃん 1 段ばしごが出来たんだよ」とうれしそうな顔をして報告に来る。D 子もうれしそうに「園長先生、やってみるから見ていて」とやり始めると、C 子が D 子の脇で D 子の指の動きを真剣なまなざしで見つめているのである。D 子が少し考え込む様子で指を動かしていると「D 子ちゃん、大丈夫それでいいよ」と励まし勇気づけているのである。D 子が「1 段ばしご」を完成させると、D 子はほっとしながらも笑顔になり、C 子は「やったー！」と自分の事のように万歳をして喜ぶ。この二人の姿に C 子・D 子の成長を感じる。この日の降園の時に母親にこの出来事を伝え、C 子の成長を喜び合うことが出来た。母親も子供の成長と共に、親としての自覚や子供を信じることの大切さを実感できた瞬間である。

考察（下線部の「10 の姿」とのつながり）

㊦ 「自立心」「言葉による伝え合い」「思考力の芽生え」
「道徳性・規範意識の芽生え」

- ・ 母親は園長と話したことで C 子に「大丈夫。必ず D 子ちゃんも出来るようになるよ」と伝え、C 子は、母親に胸のうちを聞いてもらい受け止められたことで安心して次の頑張りに向かうことが出来た。やりたいことに向かっているからこそ葛藤体験は、逆にその子の力を発揮させるきっかけにもなるのである。

C 子は、次第に D 子がかかえているところはどこなのかを捉えようと黙って見守る姿が多くなっていった。そして、必要なときに「もう一回、そ

こをやってみよう」と、D子を思いやりD子に合わせて言葉がけるのである。これは、どうやって伝えたらD子が理解してくれて、「あやとり」をやりに遂げられるようになるのかと相手の気持ちに思いを巡らせ、自分の気持ちを少しずつ調整していこうとするC子の姿である。C子自身が、自分の力で何が出来るのか子供ながらに悩み考えるというこの過程に大きな意味があると考えられる。

10 子供の姿より ー時間の感覚ー

例 1

「あやとり」が少しずつ盛んになってきたある日、㊦ E男が「園長先生、園長先生は明日何時に幼稚園に来るの?」「えっ、どうして?」と筆者が尋ねると、㊧「あのね、次のあやとりを教えてもらいたいから、僕も早く幼稚園に来ようと思っているの」とのこと。「わかったよ。8時前には来ているけれど、あやとりの時間ができるのは、登園するみんなに“おはよう”の挨拶が終わる9時からならできますよ」と伝えると、㊨「わかった!じゃあ、明日9時ね」と約束して園長室を出て行く。

また、園長室に㊩子供たちが「園長先生、今日は遊べますか?」と尋ねてくる。これは、今日園長が幼稚園に居るか居ないか。また、居たとしても園長は時々いろいろな用事があり遊べない時があるということを次第に予測することができるようになっていっているのである。遊びを継続していくことで子供たちは、相手にも予定があり自分たちの思いだけでは進められないことを自ずと知るのである。

例 2

朝、園長室で数人の年長児が「あやとり」を楽しんでいると、園長室にある㊪アナログ時計を見て、子どもたちが「あつ、もう長い針が15のところに来ている」「本当だ。もうこんな時間になった。速い!」「Y先生、長い針が20のところに来たら保育室に帰って来てねって言っていたね」「わー、もう少して終わりだ」「早くやろう」。このような会話を聞き筆者は、「そうか、今9時15分だね。Y先生と9時20分までに戻る約束したのね。じゃあ後5分だね。よーしそれまで楽しもう!」と返すと、㊫「うん。もう一回やってみる。5分で出来るかなー!」と時間を気にしながらも最後まで取り組む。それから子供たちは、より時間を意識して「今日は、給食を早く食べて、12時45分から来られるよ」「今日、Y先生は何時何分までいいって言ってたから、いっぱい出来るよ」

と、自分たちの生活と重ね合わせながら時間の感覚（速い・遅い・短い・長い）が実感できるようになってきた場面である。

考察（下線部の「10の姿」とのつながり）

㊦「健康な心と体」「数量・図形・標識や文字などへの関心・感覚」

- ・ 園長に出勤時間や予定を尋ねる行為は、毎日のように園長と「あやとり」を楽しむ生活を通して、それぞれ人には生活時間や予定があることを知り、他者の都合と自分の都合や、気持ちとをすり合わせて考える力が身に付いてきていることが分かる。相手の予定と自分の予定を考え、相手と折り合いをつけ、見通しを持って生活する態度、自分自身の一日の生活の流れを調整しようとする姿が育ちつつあるのである。
- ・ 子供たちは、時間を見ながら「後どれくらいやることが可能なのか」「今日は、時間的に長く出来るのかどうか」を感じ取り、それを言葉にして表している。この例2で分かるように時間の概念や量的感覚を感じ取れるようになるには、子供にとって生活の中で必要感を伴うものでなければならない。筆者と担任は、子供たちと日常的な会話の中で時間感覚を言葉にすることを意識して行うようにした。このことは、日常の生活や、やりたい遊びに取り組む中で行われることが大切である。子供は時間を見て、次に自分がどのようにすればよいかを見通して行動するようになってきていることが分かる。

11 「社会生活との関わり」「自然との関わり・生命尊重」「豊かな感性と表現」の「10の姿」とのつながり

「あやとり」の実践事例と「10の姿」とのつながりを述べてきたが、「10の姿」のうち「社会生活との関わり」「自然との関わり・生命尊重」「豊かな感性と表現」につながる事例が挙がっていないことになるが、その点について述べる。

「あやとり」がこれら3つの姿と全く関わり合いがないかといえばそうではない。直接的なつながりはなくとも、子供の遊びは総合的であり一つ一つを取り上げていくことはなかなか難しいことでもあるが、ここで、これら3つの姿と「あやとり」がどのようにつながるのかを考えてみる。

(1) 「社会生活との関わり」

- ・ 子供たちの中には、「おばあちゃんから新しい技を教えてもらったよ」と、祖母から教えてもらった新しい技をクラスの仲間に伝える姿があった。すると「私も、おばあちゃんの家に行ったら教えてもらおう」。このように、家族との繋がりが遊びを通して豊かになっていくのである。家族つまり家庭という場が、子供にとって安心で、とても大切な場であることを実感できる経験となる。家庭は、社会の第一歩であると考え、家族の繋がりが豊かになることは、その後の人生において社会生活を豊かに過ごそうとする姿勢にもつながると考える。
- ・ 小学校1年生の1月から3月までの生活科の単元に「昔の遊び」の時間があるが、このとき当園を卒園した子供たちがこの昔の遊び「あやとり」を通して、様々な場面で活躍してくれるという話を連携小学校の先生方・子供たち・保護者から聞いている。子供たちがそれぞれ自分の活躍できる場を広げていこうとしていることが分かる。
- ・ 筆者は実現できなかったが、発展的に考えれば地域の介護施設や他施設等との交流で、「あやとり」を披露したり、一緒にとり合ったりすることで喜んでもらえる体験になれば、地域の中で自分のやったことが役に立つ経験につながると考える。

(2) 「自然との関わり・生命尊重」

- ・ 「あやとり」は自然界と直接的なつながりはないが、例えば「山のお月様」「あげは蝶」「とんぼ」などの技から、子供たちは頭の中でどのように思いを馳せるのであろうか。実際に山の上に浮かぶ月を目にしたとき、その情景に心動かされるのではないかと期待が出来る。このように心を豊かにし身近な環境に心を動かし、好奇心をもって関わる力にもなっていくと考える。
- ・ 他者と深く関わり、励まし励まされ、受け入れられた体験は自己肯定感を育み、同時に相手を思いやる気持ちの芽生えとなるであろう。このように自分を大事にすることを実感できる子は、相手も同じような心があることを想像する力も身に付けるようになると思う。つまり、その力がいずれ生命を尊重する心を育んでいく基になると考える。

(3) 「豊かな感性と表現」

- ・ 「あやとり」そのもの自体が表現方法の一つであると考え。様々な素材の一つでもあり、子供が遊び環境として選ぶものの一つである。子供にとって自ら心を動かして選んでいく素材・用具が増えることは、遊び環境が広がることであり、子供の豊かな遊びにつながると考える。

- 「あやとり」に取り組んだことで次のような姿があった。それは、年長組の最後の行事である修了式において、子供たちが「幼稚園の思い出」と称して楽しかった思い出をグループごとに短い劇にして表現する場面がある。その場面で、あるグループが「あやとり」の体験を劇にして表現してくれたのである。子供にとって「あやとり」は心動かす楽しい体験であり、その体験をどのように表現しようかと、グループで相談し工夫している姿はまさに、この「豊かな感性と表現」につながるものである。

おわりに

述べてきた「あやとり」の取り組みの内容は、「園だより」として家庭・地域に伝えるようにしてきた。すると、保護者も関心をもって我が子の姿に目を向け、下記のような保護者の声や子供の姿があった。

- ・「新しい技を覚えると、すごく得意げに皆に披露してくれるんです」
- ・「あやとりの糸はなくせないと、いつもきちんと決まった場所に片づけて、朝起きると、幼稚園に忘れないようにすぐにバッグの中に入れるんです」
- ・「園長先生から、朝あやとりを教えてもらうから早く幼稚園に行こうと、すごく早起きをするようになりました」
- ・「あやとりをやるようになってから、家でDS（ゲーム）に目がいかなくなっとうれしいです」
- ・「〇〇さんに教えたら出来るようになったって、すごくうれしそうに話してくれました」
- ・「上の子にこの子があやとりを教えているんですよ。兄も真剣に習っていて、すごく微笑ましいです」
- ・「おばあちゃんまで入って、家族みんなで楽しんでいます」
- ・「病院の待ち時間にあやとりをやって、静かに待ってられるんですよ」
- ・「親戚の家にまであやとりを持って行って、そこでみんなに見せて得意になっているんです」
- ・家で「もちつき」・「二人あやとり」の技を覚え、クラスの仲間と取り合う姿があった。

これらの様子からも、子供は自分が興味関心をもって取り組み出来るようになったことは、生活の中にどんどん取り入れていく。そこでまた生活の仕方が豊かになっていることが分かる。

本研究では、「あやとり」を「10の姿」から具体的に見てきた。これらの「10の姿」は、内閣府・文部科学省・厚生労働省の説明からも分かるように、幼児期の到達される姿では決してないということを、私たち教師は心にとめておかなければならない。子供たちの生活や遊びには、「10の姿」のような学びや育ちの芽が育まれているという視点なのである。私たち教師は、子供の様々な可能性を信じ日々の生活や遊びを心豊かに過ごしていけるように支えていくことが大切である。その子が遊びに熱中し遊び込む経験を一つでも多く体験していける環境がどうあればよいのかを、子供たちの姿・成長の過程から見つけだし、環境をつくり出していくことが求められている。

「あやとり」を一つとっても、いかに子供の成長につながる豊かな体験がで

きることが分かった。こうした遊びは、子供たちの様々な生活や遊びの中に点在しているのである。教師は、何気ない子供の姿にどのような意味を読み取り、理解し、次の手立てをどのようにするかを考えていかなければならない。そして、それは教師の感性に委ねられている。だからこそ、教師は日々の保育記録をとり、職員間で情報を共有し研修を重ねていくことが重要になる。この度、改訂された「新教育要領」を踏まえ、教師は特に「10の姿」・「5領域のねらいや内容」を常に心にとどめ、目の前の子供たちの姿の中に、子供たちは、今何を楽しいと心を動かし、何を経験しているのか、しっかり意味付けていける力量をもたなければならぬ。そうした日々の研鑽が教育の質を向上させていくと考える。

この「あやとり」の取り組みは、筆者一人では充実した体験にすることはできなかった。年長組の担任・全職員・保護者の方々の理解と協力があったのことに感謝している。幼児教育は、そこに関わる様々な人の思いの中で支えられていると改めて感じる事ができた実践であった。

引用・参考文献

- ・「幼保連携型認定こども園教育・保育要領 幼稚園教育要領 保育所保育指針 中央説明会資料」（幼稚園関係資料）
平成 29 年 7 月 内閣府・文部科学省・厚生労働省
- ・「あやとり いととり」 採取・文：さいとう たま
絵：つじむら ますろう
1982 年発行 福音館書店
- ・無藤 隆（2016. 12. 6） 「幼稚園教育要領改訂の趣旨の解説」
- ・無藤 隆（2017. 1. 4） 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿と
5 つの領域の内容との関係を説明する」
- ・平成 26 年度新潟市立牡丹山幼稚園教育課程

